狩野直喜著

支那小説戯曲史

みすず書房

狩野直喜
支那小説戯曲史

1992年2月29日　印刷
1992年3月 9日　発行

発行者 小熊勇次
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 3814-0131(営業) 3815-9181(本社) 振替 東京0-195132
本文印刷所 三陽社
口絵・扉・函印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1992 Naosada Kano
Printed in Japan
ISBN 4-622-04687-3
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目　次

支那小說史

第一章　總論……一
第二章　小說の起源……一〇
第三章　魏晉南北朝時代の小說……一六
(一)　穆天子傳……一六
(二)　『漢武內傳』、『漢武故事』、『飛燕傳』……二三
(三)　魏晉小說一般……二六
(四)　『拾遺記』、『搜神記』、『搜神後記』、『異苑』、『續齊諧記』、『還冤志』……三一
第四章　唐代の小說……三四
(一)　怪談小說……三七
(二)　寓意小說（Allegory）——『枕中記』、『南柯傳』……三七
(三)　戀愛小說——『遊仙窟』、『長恨歌傳』、『梅妃傳』、『會眞記』……三九
(四)　詩物語——『揚州夢記』、『本事詩』……四四

(五) 隨筆――『雜纂』……四八
第五章　宋元の小說……五〇
(一) 敦煌出土の小說……五〇
(二) 『五代平話』……五四
(三) 『京本通俗小說』……五六
(四) 『大唐三藏取經詩話』……五九
(五) 『宣和遺事』……五九
第六章　『水滸傳』……六五
(一) 其の作者……六五
(二) 成立の年代……七一
第七章　『演義三國志』と『西遊眞詮』……九〇
第八章　明代の小說……一〇四
『玉嬌梨』……一〇八
『醉菩提』……一一五
第九章　清朝の小說……一一七
『好逑傳』……一一七
第十章　『紅樓夢』……一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

付　支那の俗文……一四七

支那戲曲略史

第一章　總論……一六七
第二章　上古より秦漢に至るまでの劇……一七六
第三章　六朝隋唐の劇……二〇八
第四章　宋代の劇及び樂曲……二一七
第五章　金の「連廂詞」と董解元の「西廂記」……二三五
第六章　元の雜劇……二三一
第一節……二三一
第二節　元雜劇の構造……二三五
第三節　宮　調……二三七
第四節　脚　色……二四四
第七章　南曲と傳奇……二五七
元曲脚色攷……二六五
跋　狩野直禎……二七一
索　引……i

支那小說史

第一章　總　論

予は支那文學の一門として、小說・戲曲の一斑に就いて、講述する所あらむとす。玆に豫め一言を要するは、諸子も知らるる如く、支那に於いては、此の方面の文學は他國のそれの如く發達して居らざることなり。

支那文學に於いて、俗文學卽ち小說・戲曲の一門は、支那文學なるものより見れば、一支流に過ぎずして、決して重要なる地位を占むるものにあらず、獨り重要なる地位を占めざるのみならず、從來の和漢の學者は之れを以つて文學とは考へざりしなり。

俗文學が從來支那に重きを置かれざるは、目錄に此れ等の書目を載せざるにより之れを知るべし。一體、支那は、昔より文學を重んじ、從つて書籍を大切にする所にて、從ふて昔より書籍目錄といふものがある。而して支那には之れを研究する所の目錄學なる一科の學問が出來て居る位にて、歷代の正史には、「經籍志」若しくは「藝文志」なる一門ありて、或る時代に傳はりし書目を載す。其の他政府の圖書若しくは個人の藏書家等に就いて製せし目錄は極めて多し。然るに殆んどそれらの目錄中、經史子集の書目が載つて居るが、小說・戲曲に屬す書籍を著錄せるものを見ず。彼の『四庫全書』は、乾隆帝が君主の力を以つて、天下の所有る書籍を集め、其の價値を判別し、價値あるものは、一定の形に寫さしめて之れを官庫に藏め、又た比較的價値少なきものは存目とて其の書名のみを登錄せり。これ殆んど當時に存せし書籍を網羅せるが、その中にも小說・戲曲は登載せられず。

予の知れる所に據れば、明の王圻といへるものの書いた『續文獻通考』經籍門の中に、小說なる一目ありて、其の

中に『西廂記』、『琵琶記』、『水滸傳』、『演義三國志』等の書を載せたり。然るに後世より、經籍の中にかかる書を入るるは怪しからぬといふ非難が八釜しい。一體、此の『續文獻通考』は出來榮の惡き書なれども、其の批難を受くる主なる原因は、其れ等小說・戲曲を載せしことにあり。

それから清朝の初に錢曾（遵王）なる有名なる藏書家の目錄あり。『也是園書目』と云ふ。その一番終りの所に、小說・戲曲の目錄が出て居て、元の雜劇、『水滸傳』、『三國志』等の書が登載せられたるも、此れ等は例外であつて、普通には小說・戲曲の類は目錄に入れぬものとなつて居る。換言すれば、文學としての價値を認めないのである。

ここに注意して置くが、然らば支那人は此れ等の小說・戲曲を輕蔑して、全く之れを讀まざるやと云ふに決して然らず。支那人は表裏ある人間なり。表には士君子の讀むべからざるものとして、口に排斥しながら、裏面に於いては殆んど之れを愛讀せざるものなし。『紅樓夢』に「誰でも紅樓夢を讀むと云ふ人は無けれど、誰でも之れを讀まざるはなし」との意味の語あり。之れに徵しても知るべし。支那文學には一方嚴格なる經學の反動として、此れ等の俗文學あり。之れを愛讀する者は隨分多けれども、讀者自身は娛樂の爲めに讀むものにして、文學として價値付けて之れを讀む者は殆んどなし。

今日は文學を狹義に解するときは、小說・戲曲が文學の幹部となりて居れども、支那は全く之れに反す。故に其の發生も極めて遲く、小說の起源は今ま能く之れを明らかにする事能はざれども、通例元の時代に創まれりと云ふ。卽ち今日に傳はりたる支那小說中、『水滸傳』の如きは最も古きものの一なるべきが、通例元時代の作物といはれて居る。併し予の考へによるときは、元よりももつと新らしく、明初に出來たるものと思ふ。併し今ま姑らく普通の說に從ひ、元時代の物となすべし。

併し予は後に詳しく述ぶる通り、唐末には慥に小說の萌芽ありしと信ずるが、それにしても支那文學の歷史より考ふるときは、此の發生の遲きに驚かざるを得ず。又た戲曲も、宋のとき已に雜劇あれども、如何なるものなりや明ら

かならず。今日傳はれる戲曲の最も古きものは、諸子の知らるる如く、元雜劇なり。元時代に創まり（『西廂記』は金の董解元の手に成れりといふ）、以つて今日に及べりといふ。而して此れ等の小說若しくは戲曲なるものは、今日に至るまで作者の數も決して少なしとせず。又た其の作物も極めて多しと雖も、其の割合には發達の迹を見る事能はず。文學的價値あるものを求むるときは割合に少なし。

殊に劇の方面に就いて之れを言ふに、大體に於いて明淸に出來て居る劇（卽ち雜劇、傳奇を含む）は、遙に元人雜劇の下にあるの感なき能はず。此の發達せざりしは如何なる理由によるや。抑ゝ支那にありては文といへば典雅なる文體、卽ち修飾されたる文字にあらずんば文とはいはぬ。此の意味に於いて、支那に文獻ある時代よりして、文語と口語との間には明らかに區別ありて、口語を其の儘文字に書顯はしたる如きものは、文學とはせざるなり。今ま小說を見るに其の分量に於いて色色區別あれども、無學なる婦女童幼を相手として作りたるものにして、又た人物の性情を有りの儘に示すを目的とするを以つて、口語體を用いて居る。尤も小說にも種類ありて、純然たる口語體を用いしものあり、半ば文語にて半ば口語のものあり、其の分量は異なれども、口語其の要素をなさざるはなし。

凡そ小說中に人物を描寫するとき、作者は其の如何なる人物なるかを敍述せず、其の人物の會話を其の儘載せて、讀者をして其の性格を彷彿せしむる事甚だ多し。例せば、『水滸傳』第四十五回の中に楊雄なる者あり。其の妻が裴如海といへる淫僧と私通をなせしに、楊雄の義弟に石秀なる豪傑ありて之れを覺り、或る夜如海が雄の家に忍び來るを要して之れを殺し、又た楊雄と共に其の妻を翠屏山に連れ出して之れを殺す一段あり。其の篇中、石秀が始めて楊雄の宅に於いて裴如海に面會して、直に如海の情事を看破し、如海も亦た石秀の恐るべき人物たることを知り、かかる人が居ては油斷は出來ぬと思はしむる處あり。其の原文に、

這淫婦便揷口道。這個叔叔便是拙夫新認義的兄弟。那賊禿虛心冷氣連忙問道。大郎貴鄕何處。高姓大名。石秀道。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

我麼。姓石名秀。金陵人氏。爲要閑管替人出力。又叫做拚命三郎、我是鱷鹵漢子。倘有冲撞。和尚休怪。禿賊連忙道。不敢不敢。

とあるが如き、この石秀の言葉及び其の調子によりて石秀の人物を眼前に看るの感あり。「我麼」などの語は、善く石秀の語を寫して、其の人物を言葉の調子によりて明確に知らしめたり。これらの文章は到底飜譯し能はざる所なり。

又た『水滸傳』を見るに、武松の嫂あり。淫婦なり。或る日武松役所より歸るに其の兄あらず。嫂身を化裝し、酒肴を調へて之れを遇す所あり。其の會話も甚だ巧に書かれたり。互ひに嫂嫂と云ひ、叔叔と云ひ、頂點（クライマックス）に達せし時、「你は此の半分の盃の酒を飲め」と云ふ所あり。你の一字最も善しと古人も稱せり。

雅文を以つて此れと同一なる印象を與ふる事は、司馬遷以上にあらざれば出來ざるなり。此くの如きは口語を其の儘用いし所に面白味があるなり。然し此くの如く口語を以つて綴りしものは、一概にして卑俗として士君子の之れを甄ぶべきものとせざりしなり。

今ま一つは支那文學は源を六經に發す。支那に於いては古來より「文」といふ言語を、道德治道の本なるものを記するものと考へ、苟も此れ等の大問題に關するものにあらずんば、文若しくは文學とよぶ價値なきものと考へたり。「文章は經國の大業、不朽の盛事」などと稱するは便ち是れなり。然るに支那の小說や戲曲は何如であるかといふに、勿論此れ等の作者とても決して反道德とか、超道德といふ如き思想を以つて筆を取つたと言ふものはなし。皆な勸善懲惡を標傍して居るけれども、其の中には懲惡に重きを置きしだけ、それだけ暗黑面を極端に描き、男女の情を寫したり、或ひは盜賊の事を書きたり、神仙荒唐不稽の話を書けり。又た勸善を目的とするだけそれだけ惡人を極端に寫すにより、風俗を害し、國家の秩序を亂る如き事もないではない。故に文體の鄙俗なるは猶ほ恕すべきも、讀者の心を迷はすといふ考へから、獨り益なきのみならず、極めて有害なるものとして見做されて居たのである。『續文獻通

考』に『水滸傳』の名を擧げし中に、その著者に就いて、

水滸傳敍宋江事。奸盜脫騙。機械甚詳。然變詐百端。壞人心術。說者謂子孫三代皆啞。天道好還之報如此。

とあり。つまり『水滸傳』は支那小說中の最も著名なるものの一なり。然るに三代啞となるの傳說あり。此の記事によりても、支那の小說・戲曲が如何に評價せられしやを窺ふに足らん。

かく支那人の文若しくは文學に關する考へが根底より違ふて、所謂る讀者士子は一概に小說・戲曲を輕蔑し、其の讀まるる範圍が重に婦女若しくは下流の無學者間に限られしを以つて、有力なる文人專ら古典的文章を書く事に骨を折り、此の方面を顧りみず、手に染むる事をなさなかつた。殊に小說などは、つまらぬ人間の作つたものが多き故、其の數の多い割合に立派なものの少なく、今日まで餘り發達せざる所以も、又た此こに在ると思はるるなり。

以上は小說・戲曲の大體に就いて述べたるものなるが、猶ほ細かに論ずれば、小說と戲曲の間には、社會上の位置は多少同じからず。卽ち兩者の作者の地位に高下あること是れなり。戲曲作家の方が小說家よりも其の地位稍高し。其の證據は、今日傳はれる戲曲の最古のものは元雜劇にて百種あり。其れ以外は概ね散佚して今ま存せずと雖も、此れ等の雜劇の作者は、其の名前のみは分り、且つ簡單なる履歷等も略分つて居る。此れ等は何如なる階級の人なりしかといふに、先づ當時第一流の學士文人に位すべきにあらず、單なる戲曲作家にて、戲曲以外のものを作りし者なし。只一人を除きては、他の作物の傳はれる者なし。而して其の作者の中には官吏もあれど、餘り高い地位の人はない。甚だしきに至りては、無學なる俳優自身の作になるものあり。是れを以つて文句などは極めて鄙陋なるものなれども、古典的の因習に束縛されざるを以つて、又た一種の面白味あり（元雜劇作者の目錄は、元鍾嗣成の書きし『錄鬼簿』に見ゆ。又た近時王國維氏は『曲錄』を著はし、元より淸初に至るまでの戲曲の目錄と、著者の簡單なる履歷とを網羅せり。大いに此の方面の文學を研究するものの便利とする所なり）。

それから明清時代に至れば、元人を摸倣して作つた雜劇、若しくは雜劇の形を更へたる傳奇などが澤山出來て居るが、明清時代の作者は、皆な當時に有名なりし一流の學士文人なり。乃ち戲曲作者の社會的地位は明清時代に至りて元時代のそれよりも高まれり。何故に明清の學者文人が、彼等が俗文學として輕蔑しそうな戲曲に指を染めたか、而して彼れ等が戲曲を作る事が、何故に寧ろ其の文才を示す一種の道具と見做されたかといふに、それには理由があるのである。

其れは何故かといふに、一體支那の戲曲は賓白と唱（曲）とより成立す。而して戲曲に於いて最も大切なるものは唱にあり。支那にては、今日まで聽戲（t'ing hsi）とて役者の歌ふ聲を聞きて愉快とするを目的とせり。故に自ら唱の音調及び文字に力を用ゆるを以つて、從つて有名なる戲曲は何處の文句面白しなどと評す。後ち戲曲の條に於いて詳述すべけれども一渡り申さんに、唱（曲）は何より變化せしものなりやといふに、唐末より宋に亙りて盛行せし詩餘、卽ち詞と稱する或る形式を有する詩より變化せしなり。而して詩餘は唐詩より變化せしものなり。故に廣義に於いては、唐詩も詩餘も唱も之れを樂府と云ひ得るなり。卽ち此の三者を作る心持ちは大體に於いて異ならず。故に支那の學士文人は詩とか詩餘を作る其の餘技として曲を作るなり。又た詩や詞を作り得る者は曲を作ること易し。これ學士文人が戲曲の方面に指を染むるに至りし所以なり。

併し彼れ等は戲曲を作るは眞に道樂仕事にやるので、彼れ等は決して公然として名を署せず、雅號を用いて居る。又た全集を出板するときも、此こに昔作つた戲曲を入るる樣な事は決してない。卽ち明清人は別に戲曲を作ることを耻づべきこととは思はねど、戲曲を以つて支那に普通にいふ詩文とは、根本的に價値が違ふと考へて居る。要するに戲曲の方面に於いては、元と明清とは作者の品格こそ違へ、作者の名が分つて居る（明清の人は雅號を用いて居ても、直に何人なるか分る）。換言すれば、作者自身が其の名が分る事をさ程迄嫌つて居ない。

然るに小說はさうでない。小說は戲曲より遙に鄙俗なるもの、低級なるものにて、婦孺童幼を喜ばしむる爲めに、

無學の者卽ち普通の文學にては到底成功の出來ぬとあきらめた者、若しくは支那社會の影響に依り、已れ十分の才學ありながら、世に用いられざるを憤り、時世を罵り、道德を呪ひ、小說に指を染めて其の不平を洩らすといふ人多し。

前者に於いては、假令ひ作者が名を出すも、孰れも其の名によりて、何等小說の價値を增すものに非ず。又た後者の場合に於いては、作者が名を表はせば制裁あれば、名を出すことを嫌ふなり。小說を書くは不名譽のこととて名を隱すことあり。日本・支那に傳はる有名なる小說にて誰人の作なりや作者の明らかなるもの一もなしと云ひて不可なし。此の點より見て戲曲と小說とが同じく、鄙俗文學なりと云ふも自ら其の間多少地位の高下ある事を知るべし。

之れを綜ずるに、兩者は多少社會上の位置異なれども、一は學士文人が本業の餘暇、道樂仕事としてやつたもの、一は今ま申す如く平凡の人が作つたものなるに由り、元明以來今日に傳はるものの內にて、取上げて敍述すべきものは比較的に少なし。

支那にても日本にても、小說・戲曲の歷史研究の材料甚だ少なし。日本では支那の小說が、德川時代にある一派の人に影響を及ぼせしも、他の古典の如く〔欠〕又た西洋の支那學者にありては、例へば『今古奇觀』は英佛語にその一部が飜譯さる。元曲もその幾部分は英佛語に飜譯さる。それは文學の研究が支那の社會を知るに必要なるが故なり。支那人の道德・風俗に關する事、支那の家族の事は、他の文學よりも小說に表はる。そのよく西洋の學者が早くから研究する理由なり。

戲曲と小說とは多くの場合一緖になつてゐる。卽ち支那文學の歷史に於いて、俗文學の起こる機運を生ぜし原因は、兩者に對して同じきが如きも、余は此の講義に於いて、說明の便宜の爲めに、戲曲と小說とを二つに分ち、初めに小說の歷史を述べ、然る後の戲曲に及ぶ考へなるが、何れも宋元時代より始むるを至當とす。

第二章　小說の起源

今日吾人が普通に云ふ小說は、宋元時代より始まれども、唐末に於いて既に其の萌芽ありしを信ず。されど何れにしても、支那の文學史上よりすれば、比較的新らしき時代なり。尤も此こに注意すべきは、吾人が普通に云ふ口語體の體裁の小說、卽ち『水滸傳』、『三國志』の如きは宋元時代に始まるも、其れ以外に小說あり。小說若しくは小說家といふ言葉は、非常に古き時代より用いられ、又た彼れ等の所謂る小說なるものは、澤山今日まで殘つて居る。換言すれば、小說には二種類ありて、一は口語體を以つて書かれたる吾人の普通に唱ふる小說と、他の一は漢魏以來雅文を以つて記せるものなり。宋元以來にても、吾人の云ふ嚴密なる意味の小說と、漢魏以來の雅文體の小說とは竝立して今日に至れり。我輩の目的とする所は前者にありと雖も、歷史的に述べんとするには、勢い前者より創むるを以つて至當とすべし。

小說の名が始めて書に見えたるは、『漢書』藝文志なり。初め漢の成帝の時に、朝廷に於いて、全國の書を集めて之れを調査せることあり。當時朝廷官府の書籍散佚したれば、謁者陳農をして各地を巡回し、天下の書籍を蒐集して朝廷に上らしむ。而して當時の學者劉向等をして、あらゆる書籍の讐校の任に當らしめ、向群書を調べて『別錄』なる書籍目錄を作り之れを上れり。向卒するに及び、歆亦た父業を繼ぎて書物奉行となり、『七略』なる目錄を作れり。此の『別錄』、『七略』の二書は今日傳はらざれど、後漢の世に班固が『漢書』を書きて藝文志の一門を設けしが、其の據りし所のものは此の二書なり。二書は今ま亡びて傳はらざれども、藝文志によりて前漢のとき、宮廷に集まりて

いた書籍の大略を知るべし。

さて藝文志は初めに五經を列し、後ちには諸子百家によりて書籍を分類してある。其の中に小說家なるものを擧げ、小說に屬する書の名を記し、其の次に小說家の評論をなせり。其の評論に曰く、

小說家者流。蓋出二於稗官一。街談巷語。道聽塗說者之所レ造也。孔子曰。雖二小道一必有二可レ觀者一焉。致レ遠恐レ泥。是以君子弗レ爲也。然亦弗レ滅也。閭里小知者之所レ及。亦使二綴而不レ忘。如或一言可レ采。此亦芻蕘狂夫之議也。

とあり。稗官とか小說とかいふ文字の出處は、已に此こにあり。さて此の文章に就いて少し說明をせんければならぬ。抑〻戰國時代に諸子百家の學起こりて、小說家と云ふ學派（スクール）あり。而して猶ほ盛周の時代に溯りて之れを考へれば、此れ等の學派は皆な周官に起源を有す。換言すれば、盛周の時代に所有る學術・技藝は皆な官にて之れを傳へて居た。官學ありて私學なかりき。其の性質によりて之れを掌る官廳亦た同じからざりしなり。然るに周衰へて春秋の時代となりては、周室其の綱を喪ひ、官其の職を怠り、官學が一變して私學となり、民間に變つたのである。藝文志は卽ち諸子百家の學に就きて、其の周の何の官より出でしものなるやを云へるが、小說家に就いては稗官より起こるとあり。

何故に稗官といふかならば、如淳の說によれば細米なりとありて、「クダケ」た微細なる米を稗という。畢竟本文にある街談巷語卽ち市井に傳播せる話にして、別に根據なき、たはひもなき事を云ふ義なり。古昔は王をして民間の事を知らしむるの目的を以つて、民間に起こりたる微細なる出來事、卽ち今日ならば新聞の三面欄に出て居る記事の如きものにして、政治とか道德といふ如き大問題に直接觸れざる事を蒐集して之れを王に奏する官があつた。此れを稗官といふ。これ小說家の起原なりと。

如淳曰。王者欲知閭巷風俗。故立稗官使稱說之。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com